文化の型

一　「文化の型」研究の趣旨

西山　それではこれから今年度最後の「文化における型」の研究会を開きたいと思います。それで今日はこの研究会で御発言になりましたことを、全部録音してもらいまして、それを後に、できれば『成城文藝』に載せて頂いて、それをもって研究の報告にもかえると、こういうことにしてはいかがかと思いますけれども、御異議はございませんでしょうか。それではそうさせて頂くことにいたします。それで今日の研究会につきましては、この前、御案内の時にその研究の順序をプリントして差し上げておいたわけでございますが、そういう順序で進めて参りたいと思います。私が今日は、発表の当番になっておりますけれども、総括ということを兼ねながら、させて頂きたいと思います。それで最初に「文化における型の研究」の主旨、というものを申し上げてみたいと思いますが、それはもうよくわかっているようなことでもございますけれども、もう一度改めてそのことを整理をしてみました。これは折々話し合っておりましたことでございまして、大変な大問題でございますが、最初は「日本人の生死観」という問題について

やったらどうかというようなことで、森岡さんから御提案があり、大体そういう方向になっていたのでありますが、ヨーロッパ文化の斎藤先生とか登張先生とか、或いは法学部・経済学部の杉山先生或いは上野先生などに御参加を頂くということになるともう少し広げてはどうだろう、というようなことで、尾形さんや我妻さん、中西さんなど、それに森岡さんもいろいろお考え下さいまして、「文化における型」の問題をやったらどうだろう、ということで、「文化における型の研究」と、そういうことが話題になって、大きな問題だからどなたでも参加して頂けるだろうと、こういうことになりまして、発足をすることになったわけでございます。まだ最初の時には、ですから、「文化における型の研究」というような、グループ研究、そういうプロジェクトが、きちっと、名前も決めて、ということでなく発足しちゃったんですけれども、後程それはきちっと整理することに致しまして、これはまあ私共がグループ研究・共同研究をすることによって、私達日常のライブラリーワークでありますとかフィールド調査等を致しまして、一人一人の深い沈潜した思索というものは、それは個人の研究としまして優れた文化創造を皆様方一人一人していらっしゃるわけでございますが、しかし、そういう個人の発想とか個人の読書力というものでは、不可能な創造力を発見すること、そういうためには、その自己の内なる能力を光らせるために、やはり何か共同研究といったような、そういう他の優れた研究者によりますところの、チャレンジによって思いがけない自分の内部の何かがこう光を発してくる、発光のそういうチャンスを恵まれる。これはやはり、共同研究の非常に重要なことだと思うのでございますが、ことにそういうことは、中々優れた方でないと、そういうチャンスを、つまり自分にチャレンジをして下さるようなそういう機会は、なかなかないものでございます。

中川一政という人が、木村荘八遺作展のオープニングパーティでの挨拶で次のような話をされました。岸田劉生さんの所へ行きましたところ、そこに武者小路実篤氏が、「袋が腐れば中の宝が光り出す」と書いてある額がかけてあって、その額が面白いから自分も武者小路さんからそれを書いて貰ってかけたんだ、実はこの木村荘八君というのは、自分と同年で、岸田さんの所へ行って一緒に絵の勉強をしたり展覧会やったりしてたんだけれども、死んで今丁度袋が腐って木村の宝が光りだしたんだと思う、というこ

とを話をされたのです。私は我々の共同研究というものは、この袋というものが、今のさっきの御話で致しますと私達の独断といったようなものだろうと思うんですが、そういう独断という袋をぶち破ってそうして中の宝を光らせて下さるというような、そういう人がやはり、グループ研究のメンバーだろうと思うんです。

それには非常に優秀なメンバーでないとできないと思うんですけども、成城大学には非常に優れたそういう方々が大勢いらっしゃるものですから、私は何時か成城ではそういうグループの方々の会を作って研究会ができたらと考えていたわけです。それが、ある時、中西さんと我妻さんと大庭さんと杤尾さんでしたか伊藤さんでしたか、あそこで話をしておりましたら、異口同音にそれはいいということになりまして、それで我妻さん、あなたからやれということで第一回が始まったんです。

ですからまあ、初めは「型」が何であるか、とか、型の役割とかいうような、そんなことではなくはじまってしまったんでありまして、ともかく私共の持っております自分の能力を、自分一人の力では光り出さないものを本当に優れたメンバーによりまして独断の袋をぶち破っていただこう。そして、光明赫灼と文化の光を輝かせるような、そういうグループ研究の会ができたわけでございます。

本当はそういう成果ができているかどうか、これからのことでございますけれども、しかし、そういうことでございましたので、ちんまりした形式的な研究会といったようなことではなくて、本当に光り輝くような、なんか長い間の、何時かそういう成果が産まれれば、ということが、私は、願わしい、と、思って、お世話をしはじめたのです。ですから、各自で、最も得意とする研究分野の中で、諸君の批判に耐えながらお聴きいただき批判をしていただくというようなことを発表していただこうというようなことで、発足致しました。

それで、この順序は、我妻さん、中西さん、東山さん、これが五月、六月、七月だったと思うんですが、その次、十一月が森岡さん、十二月が田中さん、一月が上原さん、二月が尾形さんと、それで、『神皇正統記』、『万葉集』の「話者としての持統」、それから「敦煌の文化について」、それから「教団のライフサイクル」、森岡さんの御発表、それから田中さんが「近代絵画界で消えていった秀才」と「磨礪(とぎし)師としての光悦」ということが、光悦の優れた文化

を特色づけている、というお話、それから、上原さんの「法隆寺の柱」、尾形さんの「芭蕉・西鶴の時代」と、こういう風に進んで参ったのであります。今まではこれだけなんです。こういう風に続けて参りまして、三月に全員残らず長崎へ参りました。長崎の茂木・五島・島原・天草そういうあたりの調査研究をしようと、いうことになったわけでございます。そこで、大学の方へ申請致しました「文化における型の研究」というところで研究目的というものを、これは、皆で話し合いまして、そこで我妻さんがこれをお書き下さったものです。ちょっと読み上げてみます。「文化は人間の生き方の総体である。ここには自然的条件により、また民族的資質なり、或いはそれぞれの歴史の発展段階に相応して生成発展し、時に大きく変容するさまざまな個性的あり様、所謂『型』がある。私共にはこの文化に於ける型の生成・展開さらに変容の相を特に地域的・歴史的そして文化領域別に、それぞれの具体相を分析・解明する事を目的とする。専門分野を異にする研究者の比較共同という研究方法により、共通したテーマを追求するのであるから、この研究は従前の文化の研究に更に大きな成果を付加するものとなるのみならず、二十一世紀へ向けての文化創造への大きな基礎作業になる事を庶幾するものである。」という雄大な目的が成立したわけです。こういうことで、今までは八人の方々に御発表を頂いて、そして最後に共同調査研究ということになったわけです。